

ナマズを活用した農村地域の活性化 Activation of rural areas by utilizing catfish

駒井 勝伸* ○福士 昭夫**
KOMAI Katsunobu* FUKUSHI Akio**

1. はじめに

青森県南津軽郡藤崎町にある福島徳下地区では、かつて沢山のナマズが川を遡上し水田へ産卵していたが、基盤整備が行われてからは水路と水田の段差が大きく、水田へ辿り着くのが難しくなった。このため、平成 20 年から地元町内会や農家の有志等で結成された「徳下集落農村活性化協議会」が主体となり、ナマズが水田に遡上できるように水田魚道の設置やビオトープを造成するなど、地域に生息する生きものを守る取組を続けてきた。また、同地区では、ナマズが泳ぐ水田で育った安全安心な米を「なまず米」と名付け、付加価値を付けての有利販売を行い、農家所得の向上や地域の活性化を目指している。



図 1 位置図

Fig.1 Location map

2. 水田魚道の設置とビオトープの造成

遡上してきたナマズが生息できる環境の整備に向け、地元農家から持ち上がった整備構想を実現するため、専門家に参加していただき設計協議を重ねた結果、平成 27 年 6 月に水田魚道とビオトープが完成した。

また、地区のシンボルであるナマズのモニュメントも設置し、関係農家や地域住民の憩いの場にもなっている。



写真 1 完成したビオトープ
Photo.1 Finished biotope

3. 地域活性化に向けた体制づくりと活動内容

(1) 組織体制の再構築

農村環境を活用した都市消費者との交流活動を進めるため、既存の体制（農村活性化協議会、多面的活動組織、自治会、土地改良区、行政）に新たに環境団体と JA を加えた組織体制とし、組織の再構築を行った。

(2) 地元小学生へ学習田として提供

次世代を担う子供達への食育の一環として、ビオトープに隣接する学習田約 200 m²を解放し、生き物観察会や「なまず米」の田植え、稲刈り等農業体験の場を提供した。



写真 2 学習田で田植えの小学生
Photo.2 Rice planting student

*青森県中南地域県民局地域農林水産部 *Aomori Prefectural Government Chunan Regional Administration Bureau Regional Department of Agriculture, Forestry and Fisheries

**青森県上北地域県民局地域農林水産部 **Aomori Prefectural Government Kamikita Regional Administration Bureau Regional Department of Agriculture, Forestry and Fisheries

キーワード：ナマズ、農村地域活性化、水田魚道、ビオトープ、多面的機能支払交付金、食育、ブランド、産直

(3) 農村環境を活用した都市との交流

J Aと連携して都市部の消費者を現地に招き、協働で取り組む生き物観察会や現地ワークショップを通じて自然環境、保全活動、地域の歴史文化などを伝えるなど、エコツアーリズムの要素を取り入れた交流活動を実践している。

4. ナマズ米のブランド化に向けて

(1) 生協との交流活動

平成 23 年から都市農村交流事業に体験型の生きもの観察会を組み入れ、集落の田んぼや水路を活動拠点とした交流を年 4 回実践しており、これに参加した生協から「なまズ米」の注文が舞い込んできた。

(2) ブランド化に向けたラベルの作成

都心の業者からの引き合いもあったことから、生きものの保全をテーマに「なまズ米」のブランド確立を目指し、ラベルデザインを作成した。

採用されたのは地元小学生が描いたもので米袋に貼り付けて販売している。

(3) 産直施設でのテスト販売

収穫された 120kg のうち 75kg を近くの農産物直売所「食彩ときわ館」で 160 袋の数量限定でテスト販売を行った。

一袋 450g（3 合入）で 450 円と強気な販売価格に設定したものの、直売所の協力で入口から目の付く最良の場所に陳列できたこともあり、1 週間程度で完売できた。

このテスト販売の結果を受けて地元農家は自信を深め、さらに伸ばして行こう気持ちとなった。



図 2 なまズ米ロゴマーク
Fig.2 Catfish rice logo



写真 3 産直施設に並ぶ「なまズ米」
Photo.2 Direct marketing facility
catfish rice

5. 今後の計画と課題

(1) 増産に向けた作付面積の拡大

平成 27 年産はビオトープに隣接する学習田でナマズ米を試験栽培したが、面積が約 200 m²と小さく収量が少なかったため、平成 28 年産は 1.6ha に増産する計画である。

さらに平成 29 年産は倍増する計画としているが、「なまズ米」作付けに賛同する農家や生産量の確保、さらにはナマズの確保やナマズの生息に問題は無いかな等の課題がある。

(2) ブランド化への取組

国内では食品の安全・安心に対する消費者の関心の高まりから、プレミアムを付けて販売しても売れる傾向が高いとされているが、誰にどのように販売するのか、等のブランド・コンセプトを明確にする必要がある。また、品質の安定を図るための栽培マニュアル確立や消費者からの評価の取り込み、さらには知的財産権の活用など、たくさんの課題が残されている。農家所得の減少と後継者不足が進むなか、地域資源のナマズを活用した農村地域の活性化とブランド化による所得向上を目指した取組が行われている。